

実践報告

看護専門学校生に対する“支援ツール”を用いた 学校生活支援の実践報告

Practical report on school life support using “support tools”
for nursing school students

片山 美穂¹⁾, 鈴木 由依子^{1) 2)}, 北岡 和代¹⁾, 矢口 和美^{1) 2)}
前田 朱美^{1) 2)}, 津田 裕子^{1) 3)}, 久司 留理子¹⁾

Miho Katayama¹⁾, Yuiko Suzuki^{1) 2)}, Kazuyo Kitaoka¹⁾, Yaguchi Kazumi^{1) 2)}
Akemi Maeda^{1) 2)}, Hiroko Tsuda^{1) 3)}, Ruriko Kyuji¹⁾

¹⁾ 公立小松大学保健医療学部看護学科, ²⁾ 金沢大学大学院医薬保健学総合研究科保健学専攻博士後期課程
³⁾ 石川県立看護大学大学院看護学研究科博士後期課程

¹⁾ Department of Nursing, Faculty of Health Sciences, Komatsu University

²⁾ Doctoral Course, Division of Health Sciences, Graduate School of Medical Sciences, Kanazawa University

³⁾ Doctoral Course, Graduate School of Nursing, Ishikawa Prefectural Nursing University

キーワード

看護学校, 看護学生, 学生支援, 学生-教員関係

Key words

nursing school, nursing student, student support, student-faculty relations

要 旨

目的：A看護専門学校では独自の学生支援ツールを学校生活支援のために活用している。その支援ツールで学生と教員は毎日やりとりしている。そこで学生の思いから支援ツールがどのように支援に役立っていたのかを明らかにする。

方法：在校生7名を対象に半構成的面接法を用い、学生支援ツールについて思っていることを尋ねた。データは質的記述的に分析した。

結果：関連する15カテゴリー【学生生活のことを書く】【支援ツールでのやりとり】【支援ツールでの相談】【教員からの返信姿勢】【支援ツールに書きたい】【もっと知り合いたい】【支援ツールは義務】【教員との距離が縮まる】【私をわかっている教員】【本音が言える支援ツール担任】等と、3つの分類“毎日

連絡先：片山 美穂

公立小松大学 保健医療学部看護学科

〒923-0961 石川県小松市向本折町へ14-1

提出するもの”“教員とやりとりできるもの”“教員との関係性を作るもの”が抽出された。

考察：支援ツールは学生にとって教員への相談のきっかけとして活用されていたと考えられる。

はじめに

現在全国の看護師養成所において、26万人余りの学生が学んでいる。令和元年度は6.5万人が入学している¹⁾。看護学生は学校生活を送るうえで多くの問題を抱えており、住谷他²⁾は、看護専門学校の学生は実習、日々の学習、人間関係の困難な体験により学業継続を困難と感じていると述べている。また、今井³⁾は、看護学生は一般大学生と比較すると、学校生活上のストレスやメンタルヘルス上の問題をより抱えること、小林他⁴⁾は、1年生の半数は窓口があれば教員へ相談したいと考えていることを報告している。八島他⁵⁾は、看護系大学生の68.4%が悩みをもっており、特に1年生においては51.3%の者が専門のカウンセラーの必要性を感じていると報告している。岩永他⁶⁾は、看護学生を対象に精神健康状態をGeneral Health Questionnaire (GHQ) -12を用いて調査しており、精神的に不健康とされる学生は全体の3割以上であり、1年生が最も高いと報告している。しかし、大学生は教員への相談がそもそも少ない⁷⁾⁸⁾ことがわかっている。入学後間もない時期は、環境や人間関係の変化、学習内容もより専門的な

ものとなり戸惑いや不安は大きい。このことは同じ年代である看護学生にも当てはまると考えられる。特に看護専門学校では、必要な課程を3年間で納めなければならないということ、学生当たりの教員数が大学と比較して少ないことなどから、時間的な余裕や教員と関わる時間が少ないと考えられる。また、看護専門学校には社会人入学生が約2割おり¹⁾、多様な背景を持つ学生が多いという特徴もある。看護専門学校生の戸惑いや不安はより多様で複雑であると考えられ、入学時から継続した学校生活への適応支援は重要である。しかし、これまで看護専門学校生を対象とした研究報告は極めて少ない。

A看護専門学校では、自己コンディション表(以下、支援ツールとする)という支援ツールを学校生活適応支援のために活用している。支援ツールはA看護専門学校が独自に開発し、学生は生活習慣の振り返りや学生生活全般の相談ができるように、また、教員は学生の学習状況や生活状況の把握、対応のきっかけにできるようにするという目的で、平成17年度から導入された学生支援ツールである(図1)。

自己コンディション表

月・日・曜日	／ (月)	／ (火)	／ (水)	／ (木)	／ (金)	／ (土)	／ (日)
本日の自己理由	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×	◎・○・△・×
体調	良い・悪い ()						
食事摂取	朝・昼・晩						
睡眠時間 睡眠の質	時間 良・不良/不足						
学習時間 学習内容	時間						
今日の感想 相談など							
教員より							

図1 学生支援ツール：自己コンディション表

しかしこの支援ツールが学生の支援となっているかについてはこれまで検討されていない。そこで支援ツールについて学生はどのように思っているのか知ることができれば、学生への支援方法の示唆が得られると考えた。

本研究は、活用していた支援ツールが支援にどのように役立っているのか、学生は支援ツールのやりとりをどのように感じているか、その思いから明らかにすることを目的とした。

方 法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究参加者

研究参加者は、参加に同意を得られたA看護専門学校在校生8名のうち、のちに辞退を申し出た1名を除く7名（1年生1名、2年生3名、3年生3名、男性3名、女性4名、社会人経験者は3名）であった。また、参加応募者は男性が多かった。

3. 選定プロセスと選定基準

A看護専門学校は、各学年40名、計120名で、そのうち社会人は約2割、男女比は2対8である。研究参加者に学年、性別による偏りが出ないように、また社会人が含まれるよう対象者を選定した。そのうち研究参加の意思を示した者を参加者とした。

4. 支援の概要

学生と教員はペアになり支援ツールを行き来させた。学生は毎日のコンディション（体調、食事・睡眠状況、学習の様子、その日思ったこと、相談したいこと等）を記載し、毎朝登校時に提出し、下校時に持ち帰った。教員は提出された支援ツールに毎日コメントした。このように交換日記のような形式で運用された。支援ツールを担当する教員（以下、支援ツール担任とする）は、主に学生の精神的な支援を担う目的で、学年担任とは別に設けられた。支援ツール担任は、各学年から4-5名ずつを混合した12名程度のグループを2グループ担当した。また、教員との相性や多様な支援を体験するという観点から1年ごとに交代した。

5. データ収集期間と方法

データ収集期間は平成30年2-8月であった。データ収集は半構成的面接法を用いた。支援ツールについて日頃思っていることについて、自由に語ってもらった。面接は20分程度で1回実施した。研究参加者の承諾が得られた場合はICレコーダーに録音した。

6. 分析方法

質的記述的に分析した。面接内容から逐語録を作成し、その逐語録を丹念に読み込み、一内容ごとに切片データ化し、意味内容の似通ったものをまとめ、サブカテゴリー、カテゴリーと抽象度を上げて概念を抽出した。さらに、カテゴリーから思いの分類を抽出した。その分類と概念を使って支援ツールについての思いを説明した。なお、分析の真実味を確保するために、質的研究に精通した研究者のスーパーバイズを受け、分析の妥当性を確認した。

7. 倫理的配慮

研究参加者には、本研究の趣旨について口頭と書面で説明した。参加者は研究に参加協力を得られる学生とし、協力は任意であること、途中棄権が可能であること、研究に参加しなかった場合でも不利益がないこと、データの匿名性と守秘性について説明し書面にて同意を得た。また、面接内容が研究参加者の学業成績等への影響がないことを保障した。学生個人が特定されることがないように、参加者の基礎データの取り扱いおよび面接は第一著者が行った。なお、第一著者は学年担任および支援ツール担任の業務は行っていない。本研究は、参加者の所属する看護専門学校の倫理委員会の承認を得た後に行った（No. 2）。

結 果

支援ツールに対する思いに関連した概念を抽出した。関連するカテゴリーは15あった（表1）。また、支援ツールに対する思い3分類が抽出された。

以下、分類は“ ”、カテゴリー【 】、サブカテゴリー< >、参加者の言葉は斜体で記入し、引用箇所の最後に参加者ID番号を[]内に示す。参加者の言葉で意味が伝わりにくい場合は（ ）にて補足説明を加えた。

1. 支援ツールについての思い

以下、カテゴリー、サブカテゴリーと分類を用いて看護学生の支援ツールについての思いを述べる。

入学後、半ば強制的に支援ツールの提出を求められる学生は、当初【支援ツールはめんどくさい】と思いつつも、<日々のストレスを書（く）>いたり<同級生のことを書いた>り、【学生生活のことを書（く）】いていた。期せず支援ツールを書くことで<自分の生活を振り返る>ことにもなり【自分を知らるために書く】者もいた。学生は支

表1 A看護専門学校の学生が支援ツールについて思うこと

カテゴリー	サブカテゴリー
支援ツールはめんどくさい	支援ツールはめんどくさい 支援ツールは書きたくない 大変で書かなくなる
自分を知るために書く	自分の生活を振り返る 自分を知るために書く
学生生活のことを書く	日々のことを支援ツールに書いた 同級生のことを書いた 日々のストレスを書く
提出と教員は関係しない	提出は教員によらない
支援ツールでのやりとり	支援ツールでやりとりする 1年生の時は毎日書いた 支援ツールを提出する習慣がある 書くことでコミュニケーションがとれる
支援ツールでの相談	支援ツールで勉強方法について相談 支援ツール担任に相談する 学生とは違うアドバイス 生活のアドバイス 気持ちをリアルタイムで伝えられる
教員からの返信姿勢	教員が共感して嬉しい 安心につながる返信 返事を忘れる教員 返信するかは教員の返信による
支援ツールに書きたい	支援ツールに書くと楽になる 支援ツールのやりとりは楽しい 書きたいから書く 支援ツール再開は楽しさと愛情
もっと知り合いたい	自分のことを知っていてほしい 教員も学生を把握できる 支援ツール担任のことを知りたい
支援ツールは義務	支援ツールは義務 支援ツール担任に言われて書く 支援ツールを強制しないでほしい 一度出さないと出さなくなる
教員との距離が縮まる	支援ツール担任との関係が深まる 他の教員に親近感がわく
私をわかってくれている教員	自分のことを知っている支援ツール担任 支援ツール担任は自分のことを見ている 支援ツール担任は味方
本音と言える支援ツール担任	支援ツール担任には相談しやすい 学年担任が支援ツール担任だと本音が書けない
支援ツール担任は私の教員	支援ツールからの特別なやりとり 自分専門の教員 支援ツール担任は特別 担当学生は特別
支援ツール担任は教員の一人	支援ツール担任と学年担任の印象は同じ 支援ツール担任より学年担任の方が近い 学年担任に相談する 悩みは支援ツールに書かない

援ツールの【提出と教員は関係しない】としていた。徐々に毎日書くことが習慣化され、<書いてコミュニケーションとれるのは良い>と感じて支援ツール担任と【支援ツールでのやりとり】をする中で、教員には勉強方法や学校生活、<学生とは違うアドバイス>を求めて【支援ツールでの相談】をしていた。この頃の学生は、支援ツールは“毎日提出するもの”として捉えていた。

提出するものとして始めた支援ツールではあるが、学生は教員からの返信に<教員が共感して嬉しい><安心につながる返信>と感じ、納得できる【教員からの返信姿勢】を求めようになっていた。教員からの返信がある場合、<支援ツールでのやりとりは楽しい>と感じ、自分のことを【支援ツールに書きたい】と感じていた。<自分のことを知っていて欲しい><支援ツール担任のことを知りたい>と【もっと知り合いたい】とも考えており、支援ツールは“教員とやりとりできるもの”と感じるようになっていた。一方、期待するような【教員からの返信姿勢】が感じられなかった場合、【支援ツールは義務】と感じていた。

支援ツールでのやりとりが続き<支援ツール担任との関係が深まる>につれ、他の【教員との距離が縮まる】とも感じていた。支援ツール担任は【私をわかってくれている教員】であり、【本音可言える支援ツール担任】という存在になっていた。そのうえで<支援ツール担任は特別>な存在と感じ【支援ツール担任は私の教員】と捉えていた。学生は支援ツールを“教員との関係性を作るもの”と感じていた。一方、支援ツール担任との関係が深まらず、義務で書いている学生は<悩みは支援ツールに書かない>とし、【支援ツール担任は教員の一人】にすぎないと捉えていた。

2. 各概念の記述

以下、3つの“分類”毎に抽出したカテゴリーを説明する。

1) “毎日提出するもの”に関連する6カテゴリー

【支援ツールはめんどくさい】：入学直後から半ば強制的に書いて提出することを求められ、<支援ツールはめんどくさい><支援ツールは書きたくない>と思い、<大変で書かなくなる>こともあると感じていた。

(支援ツールは) ちょっといらなのかなあっていうのがあったんですけど、めんどくさいっていうのもあったんですけど、[ID6]

【自分を知るために書く】：継続的に支援ツールを書くことで<自分の生活を振り返る>機会と

なり、<自分を知るために書く>こともしていた。

あとは、勉強時間を(支援ツールに)書かなきゃいけないじゃないですか。書いて(自分の生活についての)内容とか。で、なんか自分が(うまく)やれなかった日とかの反省だったりとか、昨日やれなかったから今日やろうみたいな。(支援ツールを)見て(自分の生活が)わかるから、そういう(自分のことがわかる)部分もあったかなあって思います。[ID5]

【学生生活のことを書く】：学生は支援ツールに、何気なく日々のことを支援ツールに書き(た)＞ていた。その中では学校生活での<同級生のことを書いた>り、起こった<日々のストレスを書(く)>いたりしていた。

どこどこに遊びに行ったとか、こういうもの買ったっていうのとか、好きなものとかを(支援ツールに)書いていました。[ID7]

【提出と教員は関係しない】：支援ツールの<提出は教員によらない>とし、提出先の教員が誰かは気にしていなかった。学生は支援ツールの記載と提出を求められ、その指示に従っていた。

いやー。教員によって自己コン(ディション表)を出したり出さなかったりすることはあんまり(ない)。[ID7]

【支援ツールでのやりとり】：入学時から毎日、<支援ツールでやりとりする>ことを求められた学生は、<1年生の時は毎日書いた>ことによつて<支援ツールを提出する習慣がある>状態となっていた。支援ツールを書くことによつて、支援ツール担任と<書くことでコミュニケーションがとれる>と感じていた。

それ(自分のコメント)に対して先生が、えっと「自分もそれが好き」だったりとか、「良かったね」とか、そういうことを返してくれたので、続きました。[ID7]

【支援ツールでの相談】：<支援ツールで勉強方法について相談>したり、日々の<生活のアドバイス>をもらっていた。<支援ツール担任に相談する>ことで、<学生とは違うアドバイス>をもらえたり、<気持ちをリアルタイムで伝えられる>体験をしていた。

それ(支援ツール)があることによって、あの、同じ(看護学校の)同級生とかには言えないことを、その(支援ツール担当の)先生に、愚痴じゃないですけど、愚痴とか、自分の思っていることとかも言えたんで、なんか、その今の(看護)学校生活の悩みとかを打ち明けられたんで。うん。[ID4]

2) “教員とやりとりできるもの”に関連する4カテゴリー

【教員からの返信姿勢】：教員から求められて始めたやりとりであるが、学生は＜教員が共感して嬉しい＞＜安心につながる返信＞と感じ、＜返事を忘れる教員＞と書いたことに反応を求めている。支援ツールに＜返信するかは教員の返信による＞とし、やりとりするかは教員の返信の姿勢次第と感じていた。

(続けられたのは) やっぱりなんかその、返信してくれる(支援ツールの)先生だったので、なんか、交換日記みたいな感覚で、かるくやってみました。[ID2]

これは言っているのかわかんないですけど、2年になって支援ツール担任変わるじゃないですか。けっこう、今度の(支援ツールの)先生は、忘れるんですよ、返事を。そうすると、「うーん、私も(支援ツール)出さなくていいかな」みたいな気持ちになったりとか。[ID5]

【支援ツールに書きたい】：学生は＜支援ツールに書くのが楽になる＞と感じ、継続される中で＜支援ツールでのやりとりは楽しい＞＜書きたいから書く＞と変化してきていた。また、一旦中断してしまっても＜支援ツール再開は楽しさと愛情＞と感じ再開していた。

支援ツールで一番楽しかったことは、えっと、自分がうれしいことを話したときに、先生も自分のようにうれしく書いてくれたり、[ID6]

【もっと知り合いたい】：支援ツールを通じて学生は＜自分のことを知っていてほしい＞と思うようになっていた。学生は支援ツールに対し＜教員も学生を把握＞するものとして捉えているが、学生自身も支援ツールを通じて、もっと＜支援ツール担任のことを知りたい＞と考えるようになっていた。

私をこんなにも知ってくれているので、私もその先生のことを少しでも知りたいなーって言うのが続いた理由だと思います。[ID6]

【支援ツールは義務】：支援ツール担任との関係構築がうまく進まない、＜支援ツールは義務＞と感じ、＜支援ツール担任に言われて書く＞とし＜支援ツールを強制しないでほしい＞と考えていた。そのため＜一度出さないと出さなくなる＞状態となっていた。

まあ、最初はやっぱり(支援ツールを書くことは)義務感だけど…。最近では義務で毎日(支援ツール)出さなきゃって感じでやってたけど。[ID5]

3) “教員との関係性を作るもの”に関連する5カテゴリー

【教員との距離が縮まる】：支援ツールでのやりとりは、＜支援ツール担任との関係が深まる＞だけでなく、支援ツール担任以外の＜他の教員に親近感がわく＞と感じさせていた。

もう(教員)全般的に。その、支援ツール担任は一人だけど、一人の先生でその距離が縮まったことで、周りの先生に対しても、ちょっと親近感がわくというか。[ID5]

【私をわかってくれている教員】：学生は＜自分のことを知っている支援ツール担任＞と認識し、＜支援ツール担任は自分のことを見ている＞と意識し＜支援ツール担任は味方＞と感じていた。

別に批判されることもなく、答えて頂いたの。なんか私としては心強い味方が一人できたみたいな感じでした。[ID5]

【本音が言える支援ツール担任】：学校生活の色々なことは＜支援ツール担任には相談しやすい＞と感じていた。しかし、成績評価や生活指導に関係する＜学年担任が支援ツール担任だと本音が書けない＞と感じていた。

自分はたまたま(支援ツール担任と学年担任が)違ったので、なんか、勉強のことも書いたし、その、クラスの雰囲気のこと書いたし、なんかいろんなことをハードルなく書いて。[ID5]

【支援ツール担任は私の教員】：＜支援ツールからの特別なやりとり＞が発生していると感じていた。支援ツール担任は＜自分専門の教員＞であり、＜支援ツール担任は特別＞と感じ、支援ツール担任の教員にとっても＜担当学生は特別＞な存在だと認識していた。

まあ、なんか、その3学年で何人かずつでその先生ってなったときに、なんか、まあ、学年の担任よりも、多分自分のことを知ってくれて、だからまあ、なんか特別感のあるのは支援ツールの先生かなって思いました。[ID2]

えー、(支援ツールの先生は特別感が)あります。なんか、(自分のこと)わかってくれてるって。[ID4]

【支援ツール担任は教員の一人】：支援ツール担任との関係構築がうまく進まない、＜支援ツール担任と学年担任の印象は同じ＞＜支援ツール担任より学年担任の方が近い＞＜学年担任に相談する＞と考え、＜悩みは支援ツールに書かない＞としていた。

うーん。(学年担任と支援ツール担任に対する思いの違いは)あんまり(ない)でも、(支援ツ

ール教員とは) 顔合わせて会話してるっていう感じでもないんで、あんまり、違いはなかった。[ID7]

考 察

学生の支援ツールに対する思いを3つの分類から述べる。その後学生支援ツールの活用について述べる。

1. 支援ツールに対する思い

学生は入学当初から支援ツールの記載と提出を半ば強制的に求められる。そのため学生は支援ツールを“毎日提出する”余分なものだと感じている。また支援ツール担任に対しても、たまたま担当することになった教員だと思っている程度である。そのため書かれている内容は教員との共通の話題となる勉強方法や当たり障りのない学校生活の様子等なのだとと思われる。

支援ツールのやりとりが続いてくると、学生は自分の書いたことに対し、教員からの返事がほしいと感じていた。新生は、教員に助言・相談、慰め・励ましといったサポートを求めている⁹⁾。本研究でも学生は、教員からの返信を求めている。返信は自分の思いを受け取ってもらう体験であり、その自分の思いに対し教員の思いを返してもらう体験である。教員からの丁寧な一対一のやりとりは、大切にされている、認められていると学生に感じさせていると考える。教員が親身に相談に乗ることや一緒に問題解決法を考えることは、看護学生のモチベーションを上げる¹⁰⁾。これらの関わりを支援ツールのやりとりを通して教員は行っているのだと考える。これらの結果、支援ツール教員からの返事がある場合、学生は支援ツールのやりとりを楽しんでいると感じ、教員からの返信に安心感や安堵感を持っていると推測できる。やがて学生は支援ツール担任に自分のことを知ってほしい、そして支援ツール担任のことを知りたいと思うようになっていく。また、支援ツールを、自分の気持ちをリアルタイムで伝えられるツールとして活用し始めていると考えられる。橋本他¹¹⁾や平上他⁸⁾は、問題を自身で解決しようとする学生が多いことを報告している。しかし学内に専門のカウンセラーや学生相談員がいれば安心して相談できるとする学生は3割から5割存在しているとする報告³⁾もある。支援ツールは学生の相談窓口や相談のきっかけとなりうると考えられる。一方、教員からの返事がない場合、担当の教員が見てくれないのであれば出す意味はないと考え、支援ツールを書き続けるかは教員によるとしている。返事がない

教員とのやりとりに楽しさは感じられず、支援ツールを書くことは義務であり何かのきっかけ、例えば一度出さないということがあると、支援ツールの提出が中断してしまっている。これらのことから学生は、支援ツールが継続されると、支援ツール担当の“教員とやりとりできるもの”として活用していると考えられる。

学生は支援ツールを通じて、次第に支援ツール担任に対し情緒的な結びつきを感じ始めていると考えられる。看護大学学生には自己効力感と情緒的サポート希求との間に有意な正の相関が見られている¹²⁾。学生はさらなるサポートを求めて、支援ツールを継続していると思われる。さらに支援ツールでのやりとりは、支援ツール担任以外の教員との関係づくりにも関連している。学生は支援ツール担任以外の教員にも安心や親しみを感じている。これは支援ツール担任に情緒的な結びつきを感じることで、教員全体に対する安心感や親近感につながったと考えられる。学生にとって教員は学業継続を支援してくれる人である²⁾¹³⁾。支援ツールでのやりとりにより、支援ツール担任との関係がより強まってくるため、支援ツール担任は常に味方でいてくれる教員として信頼を深めている。そのため本音に近い話をしていると思われる。その結果、支援ツール担任を自分の教員として、特別な存在と認識していると考えられる。学生は支援ツールを“教員との関係性を作るもの”と感じ、やりとりを通じて学生と教員は関係を深めていた。一方、支援ツールに楽しさを見いだせず義務で続けていた学生は、支援ツール担任に対し情緒的な結びつきや信頼は持たず、教員の一人ではないと感じ、支援ツール担任との関係は深まっていない。そのため支援ツールに悩みは書かず、支援ツール担任の相談窓口としての機能や、支援ツールの学生の学習・生活状況把握の機能は働いていない状態となっている。

2. 学生支援ツールの活用

支援ツールは、学生にとって教員への相談のきっかけとなっていた。支援ツールでのやりとりは、学生-教員間の関係を深めることができると示された。1年生は学校生活が講義中心で、教員と関わる機会は少なく教員をサポート資源だと捉えることは難しい時期にある¹⁴⁾。教員からのサポートを受けようにも、個別に相談する機会は少ない。それらの状況を考えると、支援ツールは入学時の早い時期において、相談窓口としての機能を持つと考えられる。ただし、単に学生生活指導のため

にと、生活状況や学習状況を学生支援ツールに書かせても学生の負担感を増す結果になる¹⁵⁾という報告がある。担当教員による丁寧なやりとりがあってこそ負担感を抱かせず、学生との関係を深めるのだと考えられる。そして、支援ツール担任を軸に他の教員に対しても、安心して信頼の感覚を深めている。支援ツールを入学直後から活用することで、学生の相談窓口やきっかけとなり、その後も支援ツールを継続することによって、全学年の学生が感じる困難感や悩みに気づききっかけとすることができる。これらのことから、やりとり型の学生支援ツールは、1年生だけでなく全学年の学生にとっても、学生-教員間の関係構築という点から学生支援に効果があると考えられる。しかし、学生の負担感や強制されている感覚を減らすためには、提出頻度については学生の主体性を尊重したり、記載内容が守られる提出方法を工夫したり、支援ツール担任とのマッチングについての配慮は必要になってくると考える。

本研究では、対象者をA看護専門学校の学生に限定していることから、対象校の特色が影響していることは否めない。また、対象者のインタビューを本学教員が実施したため、学生からの反応に偏りが生じた可能性がある。今後は、支援ツールを継続・再開できる要因の検討、有用な返信の方法・内容の検討、強制的と感じない運用方法の検討が課題である。

結 論

1. 支援ツールに対する思いに関連する15カテゴリー【支援ツールはめんどくさい】【学生生活のことを書く】【自分を知らために書く】【提出と教員は関係しない】【支援ツールでのやりとり】【支援ツールでの相談】【教員からの返信姿勢】【支援ツールに書きたい】【もっと知り合いたい】【支援ツールは義務】【教員との距離が縮まる】【私をわかってくれている教員】【本音が言える支援ツール担任】【支援ツール担任は私の教員】【支援ツール担任は教員の一人】が抽出された。

2. カテゴリーをさらに概念的に分析し3分類“毎日提出するもの”“教員とやりとりできるもの”“教員との関係性を作るもの”が抽出された。

3. 支援ツールは学生にとって教員への相談のきっかけとして活用されていたと考えられる。

利益相反

本研究において開示すべき利益相反はない。

引用文献

- 1) 日本看護協会出版会：平成31年／令和元年看護関係統計資料集，日本看護協会出版会，34-91，東京，2020
- 2) 住谷圭子，甘佐京子，松本行弘，他：看護専門学校生の学業継続に影響する要因，人間看護学研究，13，43-49，2015
- 3) 今井弥生：看護学生の学生生活継続における問題と心身健康，臨床福祉ジャーナル，13，7-13，2016
- 4) 小林元，菅原亜紀子，福島哲仁，他：医学部1，2年生への生活調査から低学年医学生支援を考える-医学部低学年生の生活調査と学生支援，医学教育，41(5)，359-365，2010
- 5) 八島美菜子，岡平美佐子，成順月，他：看護系大学生の悩みと相談に関する実態について-学生生活実態調査報告(III)-，看護学統合研究，13(2)，55-60，2012
- 6) 岩永喜久子，後藤有紀，宮崎晴佳，他：学部教育における看護学生のメンタルヘルスと関連要因，保健学研究，20(1)，39-48，2007
- 7) 山村りつ，市瀬晶子，引土絵未，他：大学生の「悩みとその対処方法」に関するアンケート調査とその結果-自殺予防のための方策を探る-，人間福祉学研究，8(1)，103-119，2015
- 8) 平上久美子，大城凌子，鈴木啓子，他：大学生活の継続における“イマドキ”看護大学生の特徴と有効なサポート-インタビューを通して明らかになったこと-，名桜大学総合研究，26，45-56，2017
- 9) 山本純子，近藤純子：看護系大学の新生が求めるソーシャル・サポートの特徴-社会人スキルとの関係から-，千里金蘭大学紀要，12，81-88，2015
- 10) 江藤和子，平井朝子：学生のモチベーションに影響を与える要因の検討，日本精神科看護学術集会誌，57(2)，93-96，2014
- 11) 橋本和幸，植松晃子，小川歩，他：医療系大学の新生を対象とした学生相談室への認知-年度別男女別の比較-，了徳寺大学研究紀要，8，63-78，2014
- 12) 菅谷洋子，所ミヨ子，牧野智恵：女子看護学生の精神健康状態に与える影響要因の検討-睡眠時間、ストレスコーピングおよび自己効力感が精神健康状態に及ぼす影響-，日本看護学会論文集(ヘルスプロモーション)，47，43-46，2017

- 13) 金城やす子, 鈴木啓子, 徳田菊恵: 看護学科学生の大学生活における満足度に影響する要因の検討- 学生生活調査の結果から -, 名桜大学紀要, 14, 271-281, 2009
- 14) 小林民恵, 兵藤好美: 看護学生のストレスに影響を及ぼす要因, 岡山大学医学部保健学科紀要, 17(1), 17-26, 2007
- 15) 佐藤美幸, 棚崎由紀子, 生田奈美可, 他: 看護学科における初年次教育の学生の理解と活用, 宇部フロンティア大学附属地域研究所年報, 7(1), 46-55, 2016